

インド細密画 宮廷絵画 120点との対話

府中市美術館（浅間町1） 現在開催中～23. 11. 26



「インド細密画」は、インド絵画の精華ともいわれ、ムガル王朝時代と重なる16世紀後半から19世紀半ばにかけて盛んに描かれ、イスラム文化圏で発達した「ムガル絵画」とヒンドゥ文化圏の「ラージプト絵画」に大別される。今回展示されているのは、細密画の中でも「ラージプト絵画」が充実している「畠中光享」氏のコレクションで、おしゃれな額装で展示がされている。「インド細密画」が、西洋絵画や日本絵画との違いは、作品が一辺20cmほどの小さな手のひら「サイズ」で、美しい線と色に彩られていることである。その理由は、インドでは「見る人と絵が一对一で対話する」という考えがあり、宮廷の人々が楽しんだものとされている。



《憩うクリシュナとラーダー》

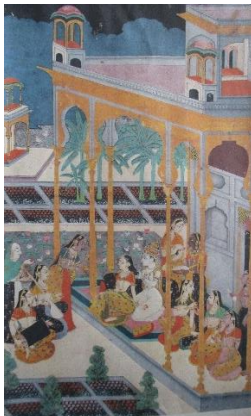
1780～90年頃

「クリシュナ」は、その美貌で女性たちを虜にしたとされ、いつも大勢の女性に囲まれ、多数の妻と子供があったとされるため絵画も華やかである。

瀟洒な宮殿のテラスで、大勢の侍女にかしずかれて寛ぐ「クリシュナ」と

「ラーダー」を描いた作品では、小鳥や蓮の花までも実に幸せそうである。

「クリシュナ」が優しく「ラーダー」の髪に触れている手も麗しく、白と金色を基調とした彼らの衣装や装飾品も豪華である。



《宮廷のクリシュナ》18世紀中頃



《神の出現》ラージプト絵画 18世紀中頃